



TITLE:

# 助数詞「本」の多義性に関する認知言語学的考察

AUTHOR(S):

濱野, 寛子

---

CITATION:

濱野, 寛子. 助数詞「本」の多義性に関する認知言語学的考察. 言語科学論集 2006, 12: 77-93

ISSUE DATE:

2006-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/88054>

RIGHT:

# 助数詞「本」の多義性に関する認知言語学的考察

濱野寛子

京都大学大学院 人間・環境学研究科

hamano@hi.h.kyoto-u.ac.jp

## 1. はじめに

本稿は、助数詞「本」の多義的な振る舞いを、認知言語学的枠組みに基づいて再分析することを試みる。そして、「本」の使用に見られる多義的な振る舞いについて、数える話者の主体的な助数詞の使用が関与していることを主張し、この観点から「本」の意味を捉え直すことの有効性を示す。

一般的には、助数詞「本」は「細長いもの」を数えると記述される。しかし、従来の研究で指摘されているように、具体的な使用をみると「本」で数えられる対象は多様である。例えば、(1)で数えられている対象は、物理的に細長い形状の特徴を有しているとみなせるが、(2)では、ボールのある特定の移動に対して「本」が用いられており、無形の対象が数えられているといえる。さらに、(3)の「電話」や「論文」は、具体的な個物として存在しているが、細長い形状のものとはみなしにくく、従来の研究でも、数える対象が何であるかという議論が分かれている。

- (1) 3本の{鉛筆／チューリップ}
- (2) 3本の{ホームラン／ヒット}
- (3) 3本の{電話／論文}

上記の例より、助数詞「本」で数えられる対象の一般化、すなわち助数詞「本」の持つ意味は、多様で複雑な様相を呈していることが確認できる。従来、「本」の意味については、様々なアプローチによって分析がなされ、記述が行われてきた (cf. Lakoff 1987、Matsumoto 1993、飯田 1999、西光 2004)。しかし、「本」が用いられる具体的な言語現象をみると、従来の研究では、我々の生活文脈に即した「本」の意味の記述が十分に行われているとは言い難い。例えば、(4)や(5)のように、通常「匹」で数えるべき対象の「魚」が「本」でも数えられる。ただし、これらの「本」の使用は、特定の文脈に限られることが(6)より示される。

- (4) ここの市場は 4000[本／匹]のマグロを仕入れた。

- (5) 彼らは 3{本／匹}のブラックバスを釣った。  
 (6) 母がスーパーで 5{??本／匹}のサンマを買ってきた。

従来の研究では、(4)や(5)にみられる現象は指摘されてきた (cf. 飯田 2004)。しかし、網羅的な記述に留まっており、記述的一般化の点から十分な議論がなされていない。この理由として、従来は、助数詞の意味として抽出された対象の特徴を、使用の場でもゆらぐことのないスティックなものとなす傾向が強すぎたことが考えられる。それ故、文脈に応じた使用を助数詞の意味として一般化することが困難になる。

本稿では、具体的な使用を反映させた助数詞「本」の意味の記述を提示する。そのために、次のアプローチをとる。まず、助数詞の根本的な記述的問題として、「助数詞によって数えられている対象は、言語表現として必ずしも明示化されない」点を重視する (cf. 濱野・李 2006)。そして、我々が助数詞を用いて数える際には、数える話者の何らかの「視点」がはたらいっていると、それによって数えられる対象が捉えられているものとする。この「視点」については、助数詞が人間と環境との相互作用の表れであるとする Denny(1987)の主張や、助数詞には数える話者の主観性が反映しているという井上(1999)の主張と関連し、数える話者の主体的な助数詞の使用を捉えるために本稿で設定するものである。この方向性のもとに、認知言語学の理論的枠組みを用いて「本」の多義的な意味の振る舞いを再分析する。とりわけ Langacker(1987, 1991)のドメイン・マトリックスの概念を援用することによって、話者の主体的な使用の上に「本」のダイナミックな意味が成り立っていることを示す。




## 2. 先行研究

### 2.1. 先行研究の批判的検討

これまで助数詞「本」の意味に関する現象は、いくつかのアプローチによって分析されてきた。本稿では代表的な先行研究として、網羅的な記述的分析を行った飯田(1999)と、理論的分析を行った研究として Lakoff(1987)、Matsumoto(1993)、西光(2004)を挙げる。以下では、各先行研究を概観し、その問題点について指摘する。

まず、飯田(1999)では、「本」を始め主要な助数詞の意味について、多様な事例の収集を元に記述を行っている。事例は、新聞記事や雑誌の他、日本語母語話者の発話データや聞き取り調査などから幅広く採取しており、最も多く助数詞の使用の現象を扱った先行研究であるといえよう。飯田(1999)の分析では、助数詞「本」で数える対象を具体物と抽象物に2分している。具体物を数える対象については、「最も目立った特徴が細長さであること」が重要な要素であると指摘し、表1に示すように、具体物の対象を3種類の形状的特徴によって分類している。

表1: 飯田(1999)による具体物を数える「本」の用法

助数詞	種類	形状	例
「本 <sub>1</sub> 」	一次元的に細長い物体		鉛筆・紐・指・木・川・道・タワー等
「本 <sub>2</sub> 」	環状になっている物体		タイヤ・ネックレス・輪ゴム等
「本 <sub>3</sub> 」	管状になっている物体		ストロー・トンネル・注射器等

また、抽象物を数える用法は、表2のように7種類に分類している。飯田(1999)は、これらの7種類の用法において「有用な項目を数える」という要素が共通していると述べている。

表2: 飯田(1999)による抽象物を数える「本」の用法<sup>1</sup>

助数詞	種類	例
「本a」	交通の運行数・便	電車、バス等
「本b」	ソフトウェア	パソコンソフト、ゲームソフト、カット集等
「本c」	情報項目	記事、原稿、話題、論文、報告等
「本d」	作品・活動	演劇、映画、番組、CM、連載、コンサート、スポーツの練習メニュー等
「本e」	連絡手段	電話(葉書・手紙)
「本f」	有用な軌跡	ホームラン、ヒット、シュート、ジャンプ等
「本g」	特定の側からのみの有用な項目	家具、契約、くじの当たり

飯田(1999)では、各々の対象において「本」以外の他の助数詞で数える場合との比較も行うなど、非常にきめ細かい観察が行われている。しかし、そうした具体的な観察から提示された「本」の意味や用法の分類が妥当であるか問題となる。なぜなら事例同士で意味的に共通しているかの判断基準が明確でない。例えば、表2では「本」の意味的特徴を一般化するための分類であるが、「本b」や「本d」の項目は名詞分類的であるともみなせる。このことから、分類の妥当性を巡って各々の分類の抽象度の均一性や、より抽象的なレベルでの一般化について検討の余地がある。

次に、理論的枠組みで分析を行った Lakoff(1987)、Matsumoto(1993)、西光(2004)について取り上げる。これらの分析は、広く認知言語学的枠組みから「本」の意味を体系的に記述したものといえる。つまり、「本」の多義的な意味について、意味カテゴリー内で中心的な事例から周辺的な事例へ意味拡張の現象が生じていると捉えている。

まず、認知言語学的観点からいち早く「本」の意味について分析を行った Lakoff(1987)では、放射状カテゴリーを形成する事例として「本」を指摘した。具体的に「細長いもののイメージ・スキーマ」から複数の動機付けによって意味拡張が生じており、「本」がそうした拡張の連鎖を成した意味カテゴリーであると分析される。「本」のイメージ・スキーマ

は「棒、つえ、鉛筆、ろうそく、木、ロープ、髪の毛など(Lakoff 1987: 104)」といった細長いものから形成される。そして、「本」のイメージ・スキーマから意味拡張が生じる際の、動機付けとして、表3の3点を挙げている。

表3：Lakoff(1987)の「本」の意味拡張

区分	意味拡張の種類		具体例
i)	イメージ・スキーマ変換		ホームラン、ヒット、バレーボールのサーブ、卓球のラリー
ii)	メタファー		電話、テレビ、ラジオ番組、映画、手紙
iii)	メトニミー	a) 心的イメージのメトニミー	テープ、映画のフィルム、注射
		b) 経験領域におけるメトニミー	剣道や刀を使う武術の試合で勝敗、ヒットやホームラン

i)のイメージ・スキーマ変換は、イメージ・スキーマ同士の関連付けから意味拡張が起こるとされる現象であるが、「本」では、ホームランやヒットが出た際にボールが描く軌跡から形成される「軌道のイメージ・スキーマ」と、「細長いもののイメージ・スキーマ」との間でイメージ・スキーマ変換が起こる。ii)のメタファーによる拡張現象は、「コミュニケーションは導管を通して行われる」という「導管メタファー(Reddy 1979)」によるものが挙げられている。例えば電話の場合、会話がやりとりされる電話線から導管メタファーと捉えられる。iii)に関しては、Lakoff(1987)はa)慣習的に形成された細長さに関する心的イメージのメトニミーと、b)経験領域におけるメトニミーの2種類を挙げている。a)では、例えばテープや映画のフィルムの場合、各々の対象について我々が慣習的に持つとされる心的イメージにおいて、細長く伸びている部分がテープやフィルムとしての機能を果たすことから、その部分がメトニミーとして対象全体のイメージとなり、「本」で数えられるという。b)は、ある経験領域内での主要な目的が、主要な機能を果たすモノ（道具）と同じカテゴリーに入る現象であると捉えられると、メトニミーによる拡張が生じるというものである。例えば「本」で数える竹刀やバットは、試合において主要な機能を達成する（点をとる）ための道具であるので、その試合で点を取ることにつながるイベントにも「本」が適用される。また、柔道や禅の問答も、剣道と同じ経験領域に属するので、試合の勝利に対し「本」が用いられるとされる。<sup>2</sup>さらにこのような拡張に加え、認知モデルがはたらくことで意味拡張が生じると指摘している。例えば手紙を「本」で数える際には、伝統的な巻物風の手紙のイメージに関する認知モデルが考えられるという。

このLakoff(1987)の分析に対して、Matsumoto(1993)は、拡張の連鎖の複雑さを指摘した。そして、プロトタイプ意味論を採用し、拡張の動機付けをより集約させて「本」の意味カテゴリーを提示した。まず、Matsumoto(1993)では、具体物の対象に関して二つのプロトタイプ条件を提示している。それは、a)際立って一次元的であり、b)輪状でないとい

うプロトタイプ条件で、この条件によく当てはまる対象が典型的な「本」の事例である。例えば、鉛筆や棒、糸、ロープ、針、バナナなどが挙げられており、一方、プロトタイプ条件があてはまりにくい対象として、カセットテープや輪ゴム、タイヤなどを挙げている。そして、抽象的な対象へは、メタファー的拡張を中心とした3種類の意味拡張を指摘している。

表4: Matsumoto(1993)の「本」の意味拡張の種類

区分	意味拡張の種類	具体例
i)	容器へのメトニミ的な拡張	注射、缶や瓶の飲み物、スティックタイプの砂糖、チューブ糊
ii)	経験的に一次元を成すものへのメタファー的な拡張	論文、連載小説、台本、テレビのコマーシャル、テレビ番組、映画
iii)	長い軌道を描くものへのメタファー的な拡張	ホームラン、電車、論文、台本、テレビ番組、電話、手紙、バス、サッカーやバスケットボールのパスやシュート、ショット

また、西光(2004)も、Matsumoto(1993)と同様にプロトタイプの理論に注目した分析である。西光(2004)では、具体物の対象が有する物理的な特徴の一部がプロトタイプ特性となり、この特性の一部が抽象的な領域へ拡張されると述べられている。プロトタイプ特性には、次の4つを提示している。それは、a)細長い、b)広がりがある、c)少なくとも一方には端(edge)がある、d)棒状のものの握り方(西光 2004: 35)である。そして、抽象的な対象への意味拡張については、例えば、a)が軌跡や時間へ拡張することを指摘している。

以上の認知言語学の理論を用いた研究は、「本」の多様な意味について体系的な記述がなされたという点で意義深いものである。しかし、これらの研究でもやはり「本」の意味として提示された制約について妥当性が問われる。また、上述の(4)から(6)の事例で指摘したような、文脈が関与する現象について説明できない。本稿では、これらの先行研究のアプローチに対して、次の2点の問題点を指摘する。

- a. 数える対象の一部の意味的特徴が過剰に一般化される可能性がある。
- b. 一般化される意味的特徴として、数える対象の外的な特徴(有生性や形状など)を重視する傾向がある。

(a)について、助数詞の意味に対する従来の規定の仕方では、数える対象に行き過ぎた意味の適応を許してしまう。つまり、「本」においては、細長い形状であるとみなしてしまえば、「本」で数えられるということができる。Matsumoto(1993)では、数える対象が一次元性を成す行為であったり、軌道を形成するものであるという条件が、どの対象に適応されるかという判断について一貫した基準を示さなければ、解釈次第でどのような行為や事物に

も「本」の適応を許すことになる。また、「細長い」形状をしているものでも、必ず「本」で数えるとは限らない。(7)のように、我々の日常生活において細長い形状を有しているといえるものでも、「本」を用いることができない。

(7) 家族で3 {???本／台} の携帯電話を買い換えた。

さらに(7)では、対象が有する様々な意味的特徴のうち、助数詞を用いて数える文脈のそれぞれにおいて、全てが同じ程度関与しているわけではない。こうした様々な特徴の関与の度合いが、使用の場において変化し、助数詞の選択に反映されるということが、従来の「本」の意味の記述ではあまり考慮されていない。(b)については、助数詞の意味の規定において、対象の形状や有生性といった外的属性に注目する傾向がみられるが、それだけでは不十分であることが、これまでの議論より明らかである。

以上のように、助数詞「本」の先行研究を概観したが、「本」にみられる多義的な振舞いについて、従来の研究では未だ不十分であるということをみた。次節では、本稿の「本」の分析の新たな方向性を示す。

## 2.2. 本研究の方向性

本節では、上述した先行研究の問題点を踏まえ、助数詞「本」の多義的な意味の振る舞いを、具体的な使用に即して捉えていくために、以下のような方向性を提案する。まず、助数詞の意味のあり方について根本的に考え直す必要があると考える。本稿では、認知言語学的観点の元に、Denny(1976)や井上(1999)の主張を重視する。Denny(1976)によると、助数詞の使用は、話者や状況によって捉えられた対象の側面に応じて変わり、また、そうした用法は、人間と環境のインタラクションによってもたらされるものであるとする。井上(1999)では、助数詞には我々の話者としての主観性が多分に反映されることを指摘している。例えば、オオクワガタについて、商品として売買する文脈で客観的に市場価値を論じる際は「匹」で数え、飼育者が手をかけて育て、野生の生き物ではなく家畜化した生き物と捉えた時には「頭」で数える。<sup>3</sup>こうしたDenny(1986)や井上(1999)の主張は、助数詞の使用を、数える話者の対象への何らかの働きかけという側面から注目したものである。本稿では、Denny(1986)や井上(1999)の考え方を取り入れ、助数詞「本」の意味が、数える話者の主体的な使用から立ち現れるものとして位置づける。そして、数える話者が助数詞を用いて数える背景には、数える話者が、数える事物を常に何らかの「視点」によって捉えるプロセスがあると考え。この「視点」が介在することによって、数える対象が明確化されると考える。こうした本稿の新たなアプローチのもと、認知言語学的観点から「本」の多義性を再分析する。基本的には、認知文法(cf. Langacker 1987)の枠組みから議論を行う。

### 3. 本研究の理論的枠組み—認知文法論(Langacker 1987)を中心に

#### 3.1. 基本概念

一般的に認知言語学では、意味(meaning)は概念化(conceptualization)そのものであると規定される(cf. Langacker 1991: 2)。概念化とは、我々が外部世界とのインタラクションを通して身についた身体的経験や感情、価値観や信念体系、社会的・文化的知識等から、様々な状況に解釈を与えていく認知プロセスにあるとされる。例えば、(8)と(9)のように、同じ状況に対する描写が異なる場合がある。これらの違いは概念化のプロセスの違いである。

(8) These two nerves converge just below the knee.

(9) This nerve diverges just below the knee. (Langacker 1999: 6)

この場合、知覚対象である「神経」に対する概念化主体(conceptualizer)の投げかける視線(mental path)の方向が、(8)は神経組織の外側から内側へ、(9)は反対に内側から外側へ向いているという違いがあると説明される(cf. Langacker 1999)。このように、ある状況に対する主体の解釈の違いが言語表現の違いとなって現れる。

なお、上記の例において主体の解釈の違いに反映されていた視線の動かし方は、我々が外界を捉えていく上で基本的に備わっている認知能力の一つであると考えられている。ここから、概念化とは、我々の様々な認知能力を介して行われており、我々の言語能力とは、そうした認知能力によって支えられているものである。

このように、意味を概念化と捉える認知文法では、解釈の違いも意味の違いとして考える。上述した助数詞の使用をめぐる問題も、この概念化の考え方を援用することによって捉えられると考える。つまり、一つの対象について用いる助数詞が異なるとき、数える話者の対象の捉え方が、それぞれの助数詞において異なっている。そして、ここに視点が関与していると考えられる。本稿の分析では、こうした認知言語学の理論的枠組みの中でも認知文法の基本的な主張と概念に従う。

#### 3.2. ドメインとドメイン・マトリックス

本稿では、数える対象を捉える際の話者の視点が変わることによって、用いる助数詞が異なると考える。この現象について、Langacker(1987, 1991, 2000)の認知ドメインとドメイン・マトリックスの概念によって表す。

Langacker(1991)によれば、意味は、喚起される認知ドメイン('cognitive domain')との関係において特徴づけられるとしている。認知ドメインは、我々の感覚的な経験、概念、知識構造などを反映する。そして、基本的に、ある概念は他の概念を通して理解される。例えば、「円([CIRCLE])」と「弧([ARC])」が特徴づけられるためには、それぞれ<空間(SPACE)>と<円(CIRCLE)>のドメインが背景となる。「円」は二次元の空間においてその形状が認知される。一方で、「弧」は「円」という概念において認知される(Langacker 1987: 183-184)。



なお、ドメイン内には、認知文法が規定しているベース(base)とプロファイル(profile)の関係が成り立つ。この関係は、あるドメイン内で、構造間にプロミネンス(prominence)のレベルがあることを示す。その際、ドメイン自体がベースとして解釈される。このようにして成立した関係を、Langacker(1987: 184)は、図1のように表す。

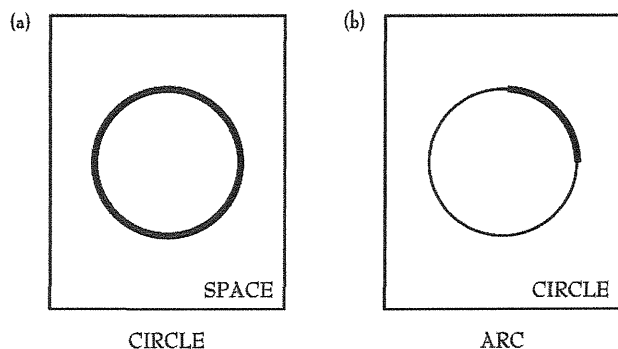


図1

外枠のボックスはドメインの範囲を表すもので、(a)の「円」は<空間(SPACE)>のドメインを、(b)の「弧」は<円(CIRCLE)>のドメインを指定している(designate)。太線の部分はそれぞれ「円」「弧」として認知されていることを示す。ベースとプロファイルの関係でいえば、(a)の場合には、「円」がプロファイル、空間がベースとなり、(b)の場合には、「弧」がプロファイル、「円」がベースとなる。(b)では、特に「円」という概念が前提になれば、単なる「線」としか認識されない。

通常、ある意味の背後には複数のドメインが存在し、それらが複合的なマトリックス(complex matrix)を形成しているとされる。例えば、ナイフ(knife)の場合、ナイフの意味を特徴付ける側面としては、形状や、ものを切る一般的な用途、食器の一つとして配置関係などによる特徴づけがある。これを Langacker(1991: 5)は以下のように図示する。

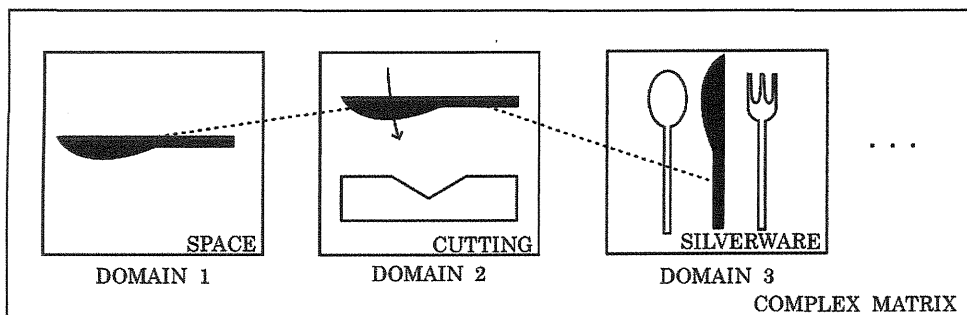


図2

点線は、結ばれたもの(entity)の間での一致(correspondence)を表す。Langacker(1991)は、この図に表されているドメインのほか、ナイフの作られる過程の情報や、サーカスでのナイフ投げというような特徴づけに関与するドメインの喚起も可能であると述べている。このドメインの喚起に関しては、我々の百科事典的知識(encyclopedic view)が反映されている(Langacker 1987, 1991)。

こうしたドメインとその複合であるドメイン・マトリックスの概念を用いて、我々が数える事物はドメイン・マトリックスを形成していると考ええる。そして、そのいずれかのドメインにおいて、数える対象が解釈される。どのドメインにおいて事物が解釈されるかについては、我々の「視点」によって選択されると考える。例えば、電話を「台」で数える場合と「本」で数える場合、前者は電話機を数えるので、物理的空間のドメインにおいて電話が解釈される。一方、後者は通話を数えるとされるので、通信手段としての抽象的なドメインにおいて電話が解釈されると考えられる。

以上、我々が外部世界を解釈していく背景には、我々のもつ様々な知識構造がはたらいっているとされ、それを規定するものとして Langacker(1987, 1991, 2000)の提唱する認知ドメインとドメイン・マトリックスという概念を取り上げた。そして、本稿では、数える対象の持つドメイン・マトリックスにおいて、話者がどのドメインを選択するかによって、用いる助数詞が異なることを提案した。

### 3.3. 認知能力について一視点との関連から

前節において、認知ドメイン内では、ベースとプロフィールなど我々の認知能力が反映されていることをみた。以下では、認知能力について視点との関連から述べる。我々は、ある言語表現が喚起するドメインによってもたらされる概念内容(conceptual content)を、我々に備わっている基本的な認知能力によって様々に解釈するとされる。その基本的認知能力とは、特に、精度(specificity)、背景知識(background)、パースペクティブ(perspective)、スコープ(scope)、プロミネンス(prominence)の5つの項目によって規定される(cf. Langacker 2000)<sup>4</sup>。例えば、図1で示したベースとプロフィールは、際立ちに属する概念であり、(8)と(9)で問題となった視線の移動に関する認知能力は、パースペクティブ(perspective)に属すると考えられる。

我々の基本的な認知能力は、「本」などの助数詞を用いた言語表現にも当然反映されているものと考えることができる。ここでは、パースペクティブ(perspective)という概念に注目する。パースペクティブは、外界を解釈する過程において、認知主体がある対象を見る際の視座や視線の方向の違いによって状況の見方も変化することを意味している。Langacker(1987)は、「我々は、慣習的にあらゆるモノを標準的な観点(canonical viewpoint)によって見ている(Langacker 1987: 123)」と規定する。この規定に従えば、助数詞を用いて数える際も、標準的な観点に基づいて対象を捉えていると考える。例えば(14)では、橋を細長い対象として捉えるには、認知主体は対象からある程度離れた位置から眺める必要

がある。

(10) 彼らは3本の橋を架ける。

ただし、標準的な観点について Langacker(1987)が論じているのは、物理的な空間における視座や配置関係のみである。本稿では、この標準的な観点についてより広く考える。そして、助数詞の選択に関わる対象の捉え方について、話者の信念や心的態度までもが関与する何らかの標準的な観点ないし基準が存在すると考える。こうした理論的枠組みに基づき、以下では助数詞「本」の意味に関与する3つの「視点」を提示し、それぞれにおいて数える対象の意味的特徴について再分析を試みる。

## 4. 助数詞「本」の分析

### 4.1. 空間を捉える視点

Lakoff(1987: 104)によれば、「本」が用いられる典型的な対象は「堅くて細長いもの(the rigid long, thin object)」であると述べている。このように「細長いもの」と言われている対象について、ドメインと認知能力との関連から対象を捉え直す。まず、空間のドメインにおいて特徴付けられる対象として、以下の例を挙げる。

- (11) 彼は2本の{指／腕}を折る。
- (12) 彼女は2本の{ビル／タワー}を見上げる。
- (13) 彼は1本の道を横切る。
- (14) 自転車は2本のわだちを残していく。

我々は、対象にあわせてスコープを設定する能力を持っている。(11)では、我々が「腕」や「指」のような身体の一部を細長いものとして解釈し「本」で数えられるには、そうした腕や指として特徴付ける概念が前提にある。つまり、「腕」場合は、「身体」という概念を前提とする。また、「指」の場合は、「手のひら」という概念を前提として解釈している<sup>5</sup>。これはスコープとしてはたらき、「腕」と「指」は、それぞれ前提となる概念の「身体」と「手のひら」がスコープとなる。「指」のように、あるものの部分が細長い物として数えられるには、スコープが関連する認知能力がはたらいているといえる。また、(12)のビルやタワーのような、我々が日常的に大きいと感じる建造物を「本」で数える場合も、対象の大きさに合わせたスコープを設定しているということになる。

これと同時に、我々が対象を捉える際、パースペクティブに関する認知能力がはたらいていると考えられる。(12)においては、ビルやタワーを見上げる際、主体の空間的な視座(vantage point)が、建物全体を捉えられる位置に据えられている。また、メンタル・スキ

ヤニング(mental scanning)が、(12)では「見上げる」という表現によって示されている。(13)では、認知主体が道路のそばに位置しているのでは、細長い物として捉えにくい。主体が道路を細長いものとして捉えるには、鳥瞰図的な視座をとり、スコープ内に一部の道路を捉えていると考えられる。また、道路と同様の認知プロセスが関わるものとして、線路がある。

(14)のように、乗り物が通る際の車輪の跡であるわだちに対しても、細長い物として「本」を用いる。わだちは、時間の経過と共に形成されるものであり、我々はその形成される様を捉えて数えることができる。このわだちを「本」として数える認知プロセスは、ボールが空間を飛んでいく際の、ボールの通った跡を、軌道という抽象物として我々が捉えていくことと関連付けられる。<sup>6</sup>Lakoff(1987)は、軌道のイメージ・スキーマが形成されると説明していたが、それと同時に、わだちのように、ものの移動によって形成される跡が具体的な形状を伴って存在することで、抽象的な領域における理解の容易さにつながっていくと考えることができる。<sup>7</sup>

なお、こうした軌道の形成とそれを認知する過程には、「時間」という抽象概念が含意される。これに関しても、「本」の抽象物への拡張の動機付けとして捉えておくべき点である。例えば、ホームランのように、ボールの移動が軌跡として捉えられるには、繰り返し起こる中で、ある一定のコースをとるものとして我々の知識に定着する必要があると考えられる。また、運行は、移動のルートが同じであること(一定の経路)と、定められた時刻に従って移動するものでないとならない。あるいは、ある時間の経過と共に経験したものを「本」と捉えていくことにも関連していると考えられる。

次に、我々の生活文脈によって対象が様々に捉えられることで、他の助数詞によって数えられる現象を、プロフィールの変化によって示す。

(15) 彼は3 {本/??枚}の包丁を{使う/買う/洗う/投げる/捨てる}。

(16) 彼は20 {本/枚}の包丁を研いだ。

(17) アルバイトは500本の内輪を配る。

(18) アルバイトは500本の内輪を運ぶ。

包丁は、平面的な特徴と、細長い形状をあわせ持つものであり、「本」と「枚」の両方の使用が容認されると考えられる。(15)の例において、細長い形状として知覚的に捉えられるため「本」が容認される。一方、(16)のように、研ぐといった包丁の面に働きかけるような行為の場合、「枚」としての平面的な広がりによってプロフィールが生じる。内輪は(17)や(18)のように、通常「本」で数える。これは、内輪の手に持つ細長い柄が、「本」として数えられているものと考えられる。しかし、内輪が次のような状況にある場合、平面的なものを数える「枚」の容認度があがる。

- (19) 彼は2{本／枚}の内輪を破り捨てる。  
 (20) アルバイトは500{本／枚}の内輪を運ぶ。

(19)の場合は、「破る」という行為により、内輪の平面的な、通常は紙で出来た部分にプロファイルが変化したと考えられる。(20)の場合は、内輪を運ぶ際に、内輪を重ねていたり束ねていたりする状態にあると、平面的な部分が接触するため、その部分にプロファイルが移ることが考えられる。こうした主体の対象の扱い方や、対象の数える時の状態によってプロファイルシフトが生じ、「枚」の使用が可能になった。このような内輪に関する現象の類例として、(21)のような状況において内輪が作られる過程における絵付けの場面で、絵を書く部分が、平面的な紙の部分なので、「枚」の容認度が上がる。

- (21) 彼女は30{本／枚}の内輪を絵付けした。

以上の事例より、助数詞を用いて数える際には、認知主体としての数える話者が、対象とどのような関わり方をしているのかが反映されているということが示唆される。つまり、我々が、ある対象を「本」で数える際には、我々の認知能力や身体を介して、その対象を細長い物として捉えるような接し方をしているということが考えられる。

#### 4.2. 機能性を反映する視点から

前節では、空間のドメインにおいて捉え方が変化する事例をみた。以下では、有形の対象の中でも、対象の機能的側面を捉えているかどうかで、用いる助数詞を選択する傾向がみられる事例をあげる。こうした捉え方がなされるドメインを、機能的なドメインと考える。本稿における「機能」とは、ある対象が数えられる際、本来の使用の目的を果たす状況にあるかということに限定する。次の例は、通常「本」でしか数えられないとされていた対象も、機能的な側面を捉えるような文脈を離れると、他の助数詞の使用が容認されることを示す。

- (22) 彼は3 {本／??枚}のテニスラケットを{使う／買う／注文する／手入れする}。  
 (23) 彼は3 {本／枚} のテニスラケットを張り替える。  
 (24) 彼女は2 {本／??枚}のしゃもじを{買う／洗う／しまう}。  
 (25) 子供は2 {本／枚} のしゃもじを張り合わせる。

テニスラケットもしゃもじも、平面的な広がりのある対象であるが、通常「本」で数える。しかし、「張り替える」や「張り合わせる」という行為が対象の平面的な部分に直接作用するため、プロファイルがシフトしたと考えられる。このとき、「本」と「枚」での使用の違いを考えると、前者は機能的側面に注目した数え方で、後者は対象の本来の使用とは関連

のない文脈での数え方だといえる。

こうした現象の一方で、機能的側面から捉えると他の助数詞が用いられるが、機能性が弱まる文脈において「本」が用いられるという場合もある。例えば、ビルや高層マンション、タワーは、通常建物を数える助数詞である「棟(トウ)」を用いる場合が多い。

- (26) 彼は30{??本/}棟のビルを視察調査する。
- (27) テレビカメラは3{本/棟}のビルを写し出す。
- (28) 彼らは3{??本/棟}の高層マンションを所有する。
- (29) 彼は2{本/棟}の高層マンションを見上げる。
- (30) 彼らは2{??本/棟}のタワーを一般公開する。
- (31) 彼は窓から2{本/棟}のタワーを眺める。
- (32) 学校は30{本/台}の長机を{そろえる/購入する}。
- (33) 清掃員は30{本/台}の長机を運ぶ。

建物は、通常人の居住や労働の場、文化的娯楽を提供する場である。そのような建物の一般的な使用に関する捉え方をすると「本」の容認性は低く、逆に、建物の形状的外観に注目している場合は「本」の容認度があがる。また、長机を、種類によっては脚を折りたたんだ状態で運ぶ過程において、机に関する一般的な使用の側面を想起しにくいため、「本」の容認度があがると考えられる。

以上、ある対象が数えられる際、本来の使用の目的を果たす状況にある、もしくは対象を使用と結び付けて捉えるかによって、用いる助数詞が変わる現象をみた。

#### 4.3. 専門性を反映する視点から

我々の日常生活において、職業や趣味などから特定の事物と密接に関与する場合がある。そして、そのような関係にある認知主体の対象の捉え方は、我々の一般的な捉え方とは異なる傾向がある。これを示す例として、(4)から(6)で示した魚がある。従来の研究では、魚は「有生/非人間」に属し「匹」でかぞえるものとされてきた。しかし、飯田(2004)の指摘によれば、a.)生きている魚は「匹」で数え、b.)釣りの獲物や、鮮魚店等で商品として取引される魚、料理の材料となる魚は「尾」で数え、また c.)釣りで釣った魚や水揚げされた魚類は形状に応じて数え、そのうち細長い魚は「本」で数えたとされている。

- (34) 息子は5{??本/匹}の鮎を飼う。
- (35) 彼らは3{本/匹}のマグロをさばく。
- (36) ここの市場は4000{本/匹}のマグロを売りさばく。
- (37) 彼らは3{本/匹}のブラックバスを釣る。

(34)から(37)までの事例をみると、(34)は魚に対して生物としての捉え方をしているのに対し、(38)から(40)に見られるように、職業・専門的な捉え方があることを示している。そして、後者の現象は、専門性のドメインの選択によって現れるものと考えられる。従来の分析では規範的に前者の捉え方がなされていたといえる。ただし、後者において、魚を釣りあげる前や、一度釣った魚を川に放す状況では「本」は容認されず、魚を捕獲した状況で「本」が用いられることが、以下の例から確かめられる。

(38) 彼は3{??本／匹}のフナを{見つける／狙う}。(フナは川で泳いでいるという意で)

(39) 彼らは40{??本／匹}の魚を網に追い込む。

(40) 彼らは3{??本／匹}のフナを(川に)戻した。

漁業や釣りの文脈であっても「匹」が用いられないわけではない。ここから、魚の場合、漁業関係者や、釣りを趣味とする者は、そうでない者よりも専門的な対象として捉える傾向があるとみなすべきだろう。

同様の職業・専門的な捉え方に関する現象は、有形の対象だけではなく、無形の事象を数える際にも観察される。

(41) 学芸員たちは3本の展覧会をこなす。

(42) ??友人は3本の展覧会を見に行く。

(43) 部下は2本の計画を説明する。

(44) ??生徒は2本の計画を説明する。

展覧会のようなイベントでは、(41)において、「学芸員」は、仕事の一つとして展覧会というイベントを主催する立場にある。一方、(42)では、「友人」は展覧会を客として見に行くという立場にある。ここから、職業としての捉え方によって、展覧会に「本」が用いられることが考えられる。また、(43)と(44)において「計画」を数える文脈をみると、(43)は、会社内で起こるイベントであり、(44)では学校で起こるイベントとなっている。ここから、(43)に反映されている視点は、職業という専門的視点が考えられる。

こうした「魚」といった生物や「展覧会」や「計画」といった抽象的な事象が、職業・専門的な視点によって「本」で数えられるという現象は、対象を規範的な分類によって捉えていては扱えない事例である。職業やその他専門的にある事物と関わる時、そうでない者よりも、接する頻度が多くなる。展覧会や計画などの製作物に関しては、さらにその作成過程において、日常的に我々が作成する場合よりも作業に費やされる労力、製作の頻度などに関して上回っている。こうした要因が、対象を規範的な捉え方から離れ、新たな捉え方を生じるものと考えられる。また、このように考えると、飯田(2004)の指摘する「企画」、「広告」「連載」に対して「本」が用いられる現象も、類例としてみなすことができる。

だろう。

## 5. おわりに

本稿では、以下のことを行った。i)助数詞「本」の先行研究に対し、数える事物の外的な特徴に基づく意味の過剰な一般化について問題点を指摘した。そして、ii)Langacker(1987)の提唱するドメイン・マトリックスの概念を援用し、「本」で数える対象の意味的特徴を、数える話者の主体的な使用の観点から捉え直した。本稿のアプローチでは、認知能力に基づく「視点」のはたらきによって「本」の意味を見直すことによって、従来指摘されてきた、「細長さ」という意味的特徴を、より具体的なレベルで観察できることを示した。なお、本稿で設定した「視点」という概念については、さらに検討が必要である。これに関しては、数える話者と数える対象との身体的な相互作用のレベルから捉えなおすことの可能性が指摘されている(濱野・李 2006)。今後の課題として、「本」の多義性の背景にはたらくメカニズムについて、本稿で得られた洞察をさらに発展させ、より多くの事例を調査し、助数詞の意味を体系的に示していきたい。

## 注

1. 飯田(1999)の抽象物を数える用法には、慣用表現(例:「一本化する」など)も含まれているが、本稿では、「本」を含む慣用化された表現は分析の対象から除外するため、慣用表現についての議論は割愛する。詳細は飯田(1999: 72-76)を参照。
2. なお、映画を「本」で数えることについて、Lakoff(1987)は、ii)による意味拡張が生じている一方で、「本」で数える映画のフィルムが、映画に関する経験領域内の主要な機能を果たすものでもあるので、メトニミーによる意味の拡張現象としても捉えられとしている。
3. 井上(1999)では、昆虫を学術的に論じる際にも「頭」を用いると指摘している。関連する議論として飯田(2004: 189)を参照。
4. これらの5項目について詳細な議論はLangacker(2000)を参照。
5. 「身体」と「腕」、「手のひら」と「指」の関係は、ベースとプロファイルの関係といえる。
6. なお、Langacker(1987)は、ものが時間の経過と共に位置を変えていく様子を、成分事態の連続として同時に共起させ、総括的に把握できるサマリー・スキニングという認知能力によって説明している。
7. さらに、抽象領域においては、ボールの移動以外にも航路がある。

## 参考文献

- Adams, Karen L. and Conklin, Nancy Faires. (1973). "Toward A Theory Of Natural Classification." *Papers from the ninth regional meeting, Chicago Linguistic Society*, pp.1-10,



- Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Aikenvald, Alexandra Y. (2000). *Classifiers: A Typology of Noun Categorization Devices*. Oxford: Oxford University Press.
- Craig, Colette. (ed.) (1986). *Noun Classes and Categorization: Proceedings of a Symposium on Categorization and Noun Classification. Eugene, Oregon, October 1983*. Amsterdam: John Benjamins.
- Denny, J. Peter (1976). "What are noun classifiers good for?". *CLS*, pp122-132.
- Dixon, Robert M. W. (1986). "Noun Classes and Noun Classification in Typological Perspective." in Craig (ed.), 1986, pp. 105-112.
- Downing, Pamela. (1996). *Nominal Classifier Systems: The Case of Japanese*. Amsterdam: John Benjamins.
- 飯田朝子(1999).『日本語主要助数詞の意味と用法』, 東京大学人文社会系研究科博士論文.
- 飯田朝子(2004).『数え方の辞典』, 小学館.
- Iida, Asako.(1996). "Classification and Categorization: Semantic Properties of Japanese Classifier *hon*." *Tokyo University Linguistic Papers*, Vol 15, pp113-141.
- Iida, Asako.(1997). "Semantic Structures of Classifiers: The meaning Chain of the Japanese Classifier *-hon*." *Tokyo University Linguistic Papers*, Vol. 16, pp173-196.
- Inoue, Kyoko. (2000). "Visualizing ability and nominal classification: evidence of cultural operation in the agreement rules of Japanese numeral classifiers." in Gunter Senft (ed.) *Systems of Nominal Classification*, pp.217-238, Cambridge: Cambridge University Press.
- 井上京子. (1999).「助数詞は何のためにあるのか」, 『言語』, Vol.28, No.10, pp.30-37.
- 濱野寛子. (2005).「助数詞の意味拡張のメカニズムに関する認知言語学的考察—助数詞「本」の用法を中心に」, 京都大学大学院人間・環境学研究科修士論文(未刊行).
- 濱野寛子・李在鎬. (2006).「助数詞「本」のカテゴリー化をめぐる一考察—統計的手法を用いて」, *Conference Handbook of Fifth International Conference on Practical Linguistics of Japanese*, pp. 36-37.
- Lakoff, George. (1987). *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作 他(訳)『認知意味論』, 紀伊国屋書店, 1993) .
- Lakoff, George and Johnson, Mark. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. (渡辺昇一他(訳)『レトリックと人生』, 大修館, 1986)
- Langacker, Ronald W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.1, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1991). *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.

- Langacker, R. W. (2000). *Grammar and Conceptualization*, Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Matsumoto, Yo. (1993). "Japanese numeral classifiers: a study of semantic categories and lexical organization." *Linguistics*, Vol. 31, pp.667-713.
- 松本曜 (1991).「日本語類別詞の意味構造と体系—原型意味論による分析—」,『言語研究』, Vol. 99, pp.82-106.
- 松本曜(編著)(2003).『認知意味論』,大修館書店.
- 水口志乃扶(2004).「日本語の類別詞の特性」,西光義弘・水口志乃扶(編著),『類別詞の対照』,pp.61-77,東京:くろしお出版.
- 西光義弘(2004).「類別詞の認知様式の相関に関する理論的考察」,西光義弘・水口志乃扶(編著)(2004),『類別詞の対照』pp.23-38. くろしお出版.
- 西光義弘・水口志乃扶(編著)(2004).『類別詞の対照』,東京:くろしお出版.
- Taylor, John R. (1989). *Linguistic Categorization*. Oxford: Clarendon Press. (辻 幸夫(訳)『認知言語学のための14章』,紀伊国屋書店,1996)
- Taylor, John R. (2002). *Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- 山梨正明(1995).『認知文法論』,東京:ひつじ書房
- 山梨正明(2000).『認知言語学原理』,東京:くろしお出版.